第一章

デルフト

十六歳のマリアは、納得がいかなかった。

――お父様は、一体どうしてデルフト[1]を離れ、「フォルモサ」と呼ばれる、オランダとは何もかも異なる未開の地などへ行こうとしているのかしら。

マリアの家族はデルフトの新しい教会の側にある、さほど大きくはないが居心地のいい家に暮らしていた。三階建てで五つの部屋があり、窓の下には運河が流れていた。大型の船と小型の船を一艘ずつ所有していて、マリアは姉や妹と一緒に小船を漕いでデルフトの運河を周遊するのが大好きだった。彼女の父親アントニウス・ハンブルク牧師はロッテルダムに生まれ、ライデン神学院を卒業後、牧師としてデルフトに遣わされて今日に至る。アンナという女性と結婚し、子供たちもみなこの町で生まれた。彼ら一家はデルフトの人々から特別に敬われ、平穏で楽しい日々を送っていた。

父がフォルモサ行きを決心するきっかけとなったのは、ライデン大学神学院の先輩にあたるロベルトゥス・ユニウス牧師から、フォルモサにまつわる話を聞いたことだった。ユニウスはフォルモサに十四年間も滞在した後、一六四三年にそこを後にし、デルフトに戻ってきていた。

帰国後、ユニウスはことあるごとにフォルモサの人々との思い出話を口にしていた。そしてこの年の春の、ある雨の降る午後、彼はハンブルクの家を訪問した。

あの日、リビングのドアの裏で偶然耳にした父とユニウスの会話を、マリアは忘れることができない。

「かの島の住民には首狩りの悪習があるというのに、貴殿はなぜそんなにも彼らを好いておられるのですか」

と父が訊ねた。ちょうどクッキーを客人に出そうとしていたマリアは、不意に「首狩り」という言葉を聞いて、息を飲み、耳を澄ませた。

「言葉にすればまことに矛盾しておるのじゃが、彼らは確かに首狩りの風習を持っているものの、決して食人族ではなく、凶暴でもない」

ユニウスはフォルモサ人の生活と習俗について語り出した。

「貴公はきっと奇怪に思うじゃろうが、実際のところフォ

ルモサ人は、善良とさえいえる民族なのじゃよ。首狩りは一つの不幸な慣わしに過ぎず、彼らはこれをもって自らが勇敢な狩猟者であることを証する。それに、彼らは食うに困らない。大草原の至るところに鹿が棲んでいるからな。フォルモサの人々は、まことに賢い。鹿を捕らえるにあたっても、あらかじめ数が定められており、それを超えることは絶対にない。そうやって人間と鹿の群れとのバランスを保ってきた。それにしても、フォルモサ人はなんと恵まれていることじゃろう！　大地には鹿と美しい鳥類がいるだけで、虎やライオンのような獰猛な動物はいない。人を怪我させ得るのはせいぜいイノシシくらいじゃ。聞くところによれば、山奥には黒熊や、小型の豹も棲んでいるそうじゃがの。

　かくも居心地よい環境におるがゆえ、フォルモサの人々はいまだ農耕社会に入っておらん。そんなことをすべき理由がない。容易に食物が得られるのに、わざわざ苦労して作物を育てる必要があろうか。しかしいくら居心地よい環境の下でも、男たちは自らが勇士のなかの勇士であることを証明せねばならず、そのためにイノシシを狩りに行く。また時には集落間での衝突が避けられず、それはたちまち武器を手にしての闘争に発展する。そこで相手の首を斬り取ることが、勇士の象徴となっているわけじゃ」

　続いてユニウスは、フォルモサで布教を行う上での心得について語りはじめた。

「それゆえキリストの教えを広め、彼らに文明の観念を植えつけ、互いに平和的に付き合い、互いを愛し合うようにし、殺し合いや、首狩りを勇士の象徴と見なすことを止めさせさえすればよいのじゃ。それは一面において大勢の人命を救うことになり、一面において我々改革派教会がフォルモサで最善の信徒を得るという結果をもたらすじゃろう。

　バタヴィア[2]の土着民の数はフォルモサよりずっと多いが、大半がイスラム教徒で、キリストの教義を受け入れる余地はない。フォルモサ人は違う。彼らは信仰を持たず、いわば白紙の状態にあり、その上なかなか聡明だ。わしは前任のカンディディウス牧師[3]と協力して、彼らのためにラテン文字を使った表記法を考案し、それを使って母語で聖書を読めるようにしてやった。またわしがフォルモサに遣わされておった十数年間に、一千人を超えるフォルモサ人に洗礼を授けた。フォルモサでの布教は、貴公にとっても大いにやり甲斐のある仕事となるはずじゃ！」

　ユニウスは自信に満ちた語気で話を切った。彼はハンブル

クとその日の午後いっぱい語り明かし、そのまま夕食もとっていった。食事の席で、彼は一枚のインド東方地域の地図を開いてみなに見せた。それはマリアがいまだ目にしたことのない世界の果てだった。もともと彼女にとって東方といえば、美しい絹織物や青白の磁器を産する明国のことであり、最近はデルフトでも明の様式の青白磁器を製造することが流行し出している。そんな東方に、今なお首狩りを行う土着民のいる大きな島があろうとは、思いも寄らなかった。しかもその島が「フォルモサ」、麗しの島と呼ばれているなんて。首狩りをする土着民といかにかけ離れていることか！

この日から、父はしばしばユニウスと連れ立って出かけるようになった。母は彼らがデルフト市内の東インド会社支所へ行って何事か相談をしているらしいと言った。マリアはその会社の名に聞き覚えがあった。デルフトにも巨大な倉庫を置いていたから。ひと月後、父は家族全員の前で告げた。

「みんなで、フォルモサに行こうと思う」

第二章　マリア

母親のアンナは当初同意しかね、父にあれこれ意見を述べた。

「ユニウス様はお一人でフォルモサへいらっしゃったのに、あなたは家族を連れていこうというのですか。末娘のクリスティーナはまだ四歳にもならないのですよ！　私たちではなくて、若い牧師を連れていくべきではありませんか」

マリアもひどく気落ちした。というのも彼女はつい最近、ヤン・ファン・プライセンという名の青年を愛するようになったばかりだったから。ファン・プライセンの家はハンブルク邸の近くにあり、両家には前々から往来があった。ファン・プライセン家の次女アガサは、マリアやマリアの姉ヘレーナと歳が近く、よく一緒に遊んでいた。ヤンはアガサの叔父にあたる。叔父とはいえど、実際にはアガサと六、七歳しか離れていないのだが、年齢にそぐわぬ落ち着きを具えていた。兄の営む楽器店を徒弟として手伝っているヤンは、将来いくら